シリーズ 再検証 ④

「周恩来」と〝接見〟した記者の回想録

「日中国交正常化」の立役者――

今だから話す ■取材メモ帳から

■美丈夫から老練へ

幻の周恩来

UHBニュース編集長 弓削栄治

ラさんは部厚い〝竹のカーテン〟、日本は日米安保条約発効の直後だったのだけにアメリカ一辺倒。そんな二つの世界の谷間で、道新東京総局社会部次長だった弓削栄治さん＝江別市大麻扇町六―二＝。今はUHBテレビ広報紙「UHBニュース」の編集長だが、道内では、周首相会見歴の数少ない一人。戦前と合わせて二度の訪中、前後五年半の滞留で、マチの中国通でもあるのだ。

昭和30年周恩来と会見した記者団（上）と当時の周恩来首相

■華麗なトン・ペー戦で

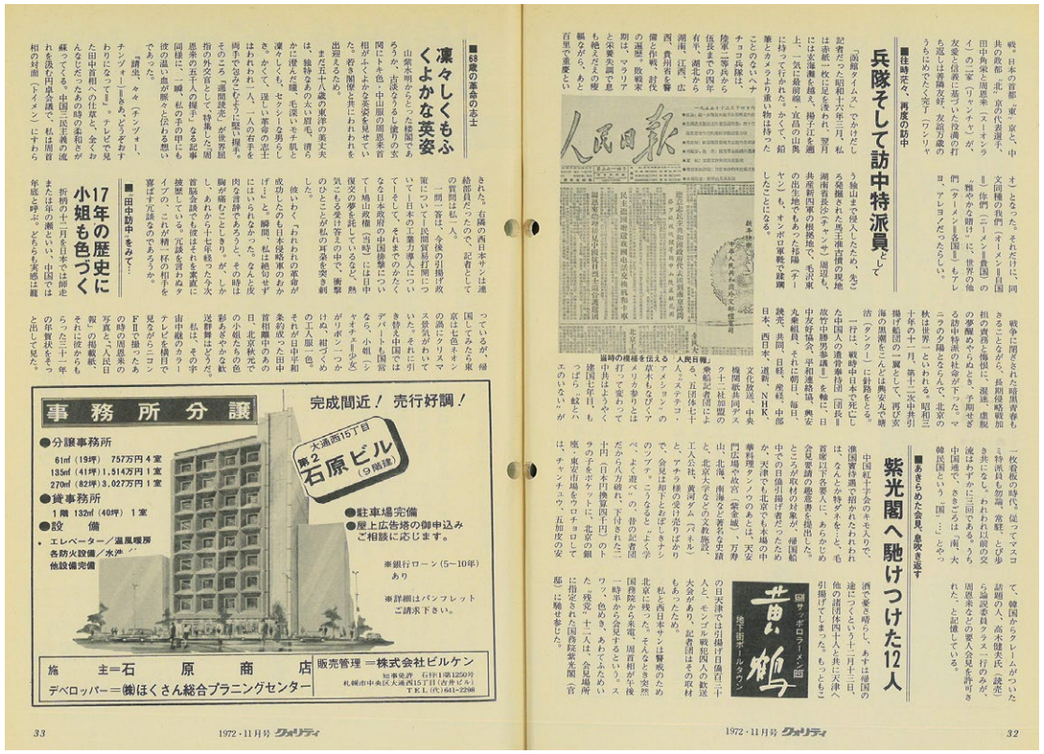
日中復交の橋架ける

「千里流れりゃ、水さえ濁る…」と歌った悠久の流れがジャンクと共に、眺をついて離れない。その長さ五千二百キロ、北海道から沖縄までの日本列島をはるかにしのぐ黄濁、范渺（ぼうびょう）の大河口揚子江に、武漢、南京と二つもの〝長江大橋〟を、さらにはそれ以上の黄河沿岸鄭州に、二千八百八十メートルの黄河大橋を架けてしまう中国だ。すべてが、じっくり、でっかく、ねばり強く―の、大陸、大人（ターレン）のお国ぶりとあれば、日本海を跨いでの〝日中復交・夢の大橋〟を実現させたのもムベなる哉。

こんどの平和条約締結のドラマを、マージャン式にたとえれば華麗な東・北（トン・ペー）戦。日本の首都、東京と、中共の政都、北京の代表選手、田中角栄と周恩来（スーオンライ）の二家（ツャンナヤ）が、友愛と信義に基づいた投満の打ち返しは善隣友好、友誼万歳のうちにめでたく完了（ワンリャオ）となった。それだけに、同文同種の我們（オーメン＝自国民）仲間（ニーメン＝敵国の人）の裏切りは、世界の笑いものとなる。

「無辜の人民を殺傷した中国人の犯罪行為を、日本国政府は厳重に抗議する。中国政府は、日本国政府に対し、中国人の遺骨の即時返還を要求する。」

一行は、戦時中日本で死亡した中国人の遺骨事件（通称＝故竹中勝男事件）を軸に、日中友好協会、平和連絡協、興安連絡員、それに朝日、毎日、読売、共同、日経、産経、中部日本、西日本、道新、NHK、文化放送、中央放送、中央機関紙共同ス（ク十二）社団盟の乗船記者団による、五団体七十人。ステテコ・アメジョンの草木もなびくアメリカ参りとは打って変わって、中共はよりくっきりの大人ぶりで、ソ連国を横目で見ながら二コンドBIIで周恩来の写真と、人民日報の掲載紙、それに彼からもらった三十一年の年賀状をそっと出して見た。



■68歳の革命の志士

凛々しくもふくよかな英姿

山紫水明かとうたう楼閣あろうか、古淡なるも優美の玄関にキ色、中山服の周恩来首相がすくやかな英姿を見せている。若き関係と共にわれわれを出迎えるため。

まだ五十八歳の東洋の英文は、独特なあの太い眉毛、堂々たる鼻、毛深いモチ肌と凛々しく、セクシーな男らしさ、かつての時の志士はわれわれ一人、一人の右手を両手で包みこむように固い握手。その時は、その交歓とは、特権とか関係とか、ケチくさい、一瞬の私の中に、彼の温かい思いが伝わる想いであった。

「諸兄、ゲゲ（チンツォー、わりにくい）ＴＥＮ（ゴ、どうぞおかけになって下さい」。テレビで見た田中首相への仕草と、全くおなじだったあの時の柔和の流れ。それにつながる、中国三民主義の流れを汲む用車会議で、私は周首相の右面（ウイメン）にすわらされた。右隣の西日本サンは通国してみたら東京は七色ネオンの渦にケリマス景気がわいていた。それに引き替え中国では、デパートも国営なら、小姐（シャオチェ＝少女）がリボン一つかけぬ、相づくりの工人服。色、それだけ中央集約的な田中首相離れのあの日、北京秋空の小姐たちの色彩あるかをかぶる紅送迎舞はどうだ。

私は、その宇宙中継のテレビを見ながら、ＴＶ中継の、人民日報の掲載紙、それに彼からもらった三十一年の年賀状をそっと出して見た。

■田中訪中を…

17年の歴史に小姐も色づく

折柄の十二月を日本では師走、または年の瀬という。中国では年底と呼ぶ。どちらも実感は維きれた。右隣の西日本サンは通国してみたら東京は七色ネオンの渦にケリマス景気がわいていた。それに引き替え中国では、デパートも国営なら、小姐（シャオチェ＝少女）がリボン一つかけぬ、相づくりの工人服。色、それだけ中央集約的な田中首相離れのあの日、北京秋空の小姐たちの色彩あるかをかぶる紅送迎舞はどうだ。

私は、その宇宙中継のテレビを見ながら、ＴＶ中継の、人民日報の掲載紙、それに彼からもらった三十一年の年賀状をそっと出して見た。

■往時苦々、再度の訪中

兵隊そして訪中特派員として

「南極タイムス」（やけだしは赤紙）枚に記を書われ、習月、私には充満を越え、揚子江を過上、一気に南京峰、宜昌の山奥陸第二師兵隊は、仮装まで、ハルビンを過ぎ、ハルビンを過ぎ、ハルビンを過ぎ

続きは『月刊クォリティ』本誌をご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
https://qualitynet.co.jp/koudoku/

○お電話でのお申し込みはこちらから
TEL 011-644-0101
（9:00 ～ 17:30　土日・祝日をのぞく）